

魂の棺 1

ナイトランナーⅥ

リン・フルエリン

訳／浜名那奈

立 ち 読 み 専 用

立ち読み版は製品版の1～20頁までを収録したものです。

ページ操作について

- 頁をめくるには、画面上の▶（次ページ）をクリックするか、キーボード上の▶キーを押して下さい。
- もし、誤操作などで表示画面が途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
- 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。
- 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

THE NIGHTRUNNER SERIES:
Casket of Souls (#6)

by

LYNN FLEWELLING

Copyright ©2012 by Lynn Flewelling

Japanese translation rights arranged with
Lynn Flewelling c/o The Knight Agency
through Japan UNI Agency, Inc., Tokyo
Japanese edition ©2015 by Chuokoron-Shinsha, Inc.

口絵・挿画 由貴海里
地図 平面惑星

目次

第一章	ある晩の愉しみ	15
第二章	夜の仕事	33
第三章	ベカ・カヴィッシュ	53
第四章	アレクのちょっとした試練	62
第五章	闇の中のささやき	84
第六章	ウリア	90
第七章	《車輪通り》	94
第八章	輝かしき晩	102
第九章	芸術の後援者たち	124
第十章	テウス	130
第十一章	罪と社交性	134
第十二章	夜間の襲撃	150
第十三章	《黄金の鶴》	160
第十四章	好印象を与える	169
第十五章	王族とお近づきに	189
第十六章	複雑	208
第十七章	陰謀	219
第十八章	ブレイダー	228
	訳者あとがき	242

登場人物紹介

サージル

故郷から追放されたオーリンフェイの青年。アレクと共に密偵として働く

アレク

ハザドリールフェイと人間の間に生まれた青年。サージルに命を救われた過去がある。密偵としてスカラのために働く



セロ

ナイサンダーの跡を継いだ、若き魔法使い

マイカム

サージルの友人

ベカ

《女王の騎士》の大尉。マイカムの娘

ナイアル

オーリンフェイ。スカラ軍の偵察兵。ベカの夫

デイノス

《女王の騎士》の大尉。レルセウスの長男

クライア

王女。最前線で戦う《女王の騎士》司令官。サージルの友人

フォリア

スカラの女王。クライアの異父姉

コラザン

摂政。フォリアの双子の弟

エラニ

世継ぎの王女

カイリス

サージルの友人

ヤスメイ

カイリスの姪

レルセウス

公爵。エラニ王女の後見人

アラヤ

女公爵。エラニ王女の女官長

マルサス

公爵。サージルの友人

ラネウス

公爵。マルサスの知人

アトレ

《カゴ通り》に劇場を構える俳優

ブレイダー

アトレの一座の座員

メリナ

ブレイダーの妻



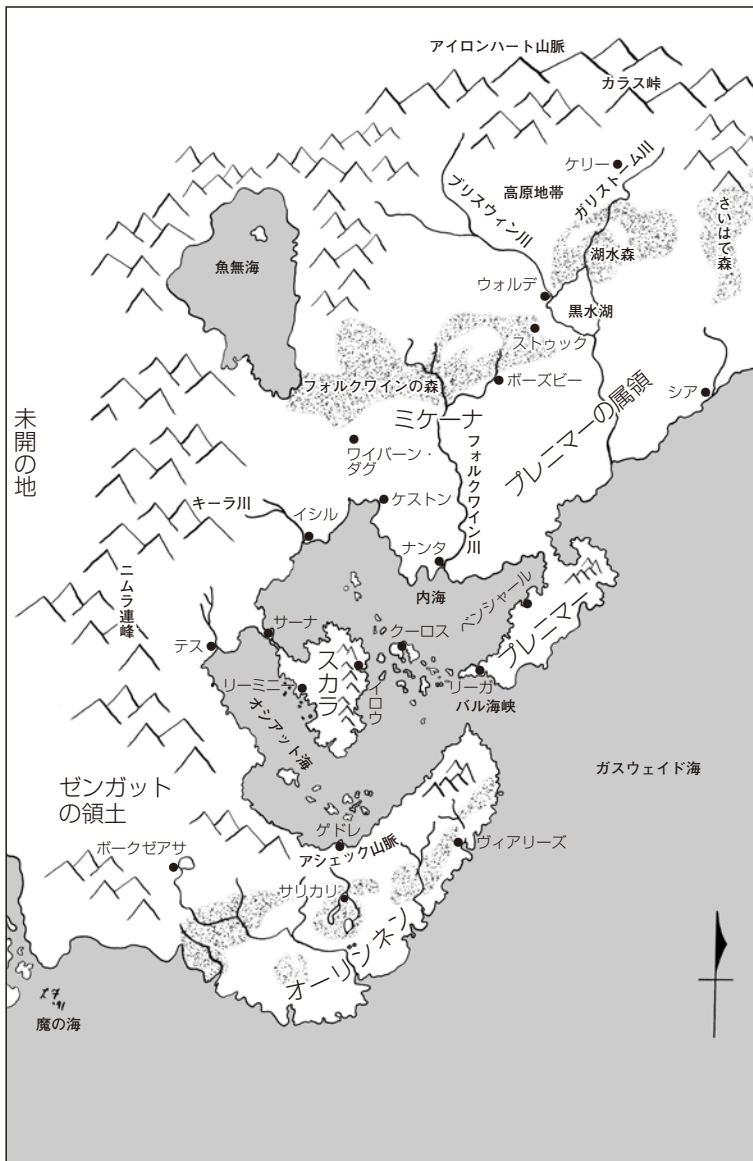
長年にわたり、わたしの仕事を大きく育て、

羽ばたかせてくれた我が友、ルシエン・ダイバーに捧ぐ

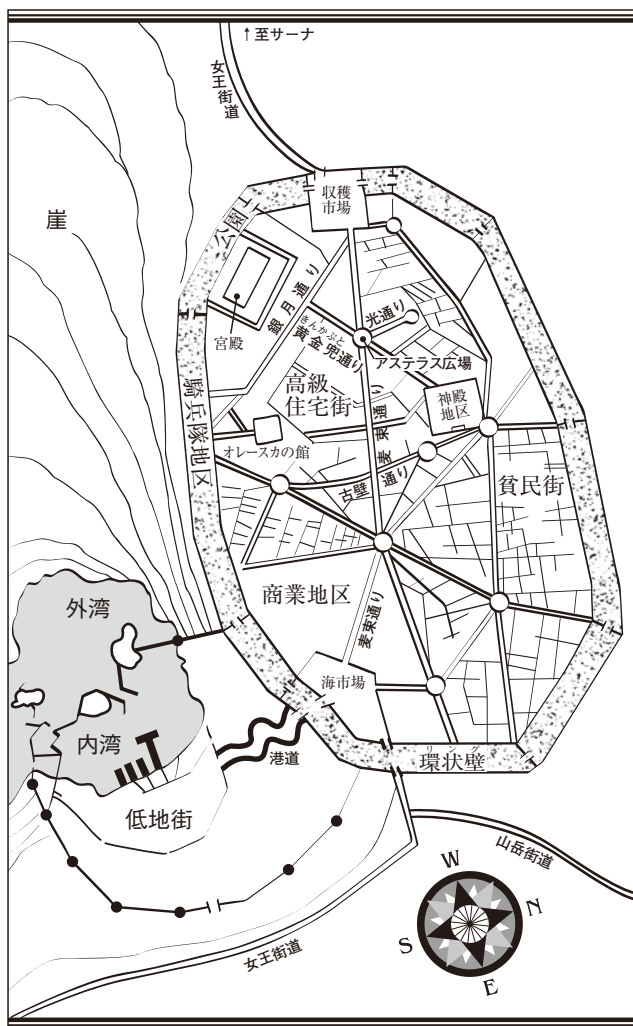
謝 辞

わたしを支えてくれた夫ダグと息子たち、家族や親戚の皆、支援してくれた友人やファンたちに、いつもながら感謝します。もちろん、すばらしいエージェントであるルシエン・ダイバーや、わたしの作品をいつだってより良いものにしてくれる有能な編集者アン・グローウエル、作品の表紙にこの上なく魅力的な生命を吹き込んでくれるイラストレーターのマイケル・コマークにもお礼を言うわ。

そして、わたしの友である詩人ジェニファー・クロウにも、特別な感謝を。第十四章に出てくる美しい詩、『青き葉の時』は、彼女が快く提供してくれたものです。彼女の他の作品をチェックしてみて。驚くべき才能よ。



〈スカラの首都リーミニ〉





魂の棺 1



ナイトランナーⅥ



第一章 ある晩の愉しみ

サージルは、今夜の劇に何を期待すべきなのかわからなかった——要するに、何も期待していなかったのだ。《カゴ通り》に建つ、このさびれた小さな劇場は、一流とは言えない商人たちのための施設だった。つまり、文化的なものに触れたいと思っっているが、街の反対側にある《光通り》のテイラーリ劇場に通うには金も足りないし、洗練されてもいい、という連中向きなのだ。彼の知るかぎり、ここはつい最近まで閉鎖されていた。張り出し舞台の彩色は色褪せて剥がれ落ち、金箔は曇り、舞台前端的



フットライトは隙間風のせいであちちと揺れている。舞台背景の幕だけが新しく、暗く不気味な森を見事に描き表していた。

この劇場は観客が百人入れるかどうかという程度の大きさで、客の大半は一番安い、舞台前の平土間で立ち見する。平土間はほぼ満員、うだるような暑さのせいで、彼らの体臭が劇場中にキツく立ち込めている。今年の夏はまだはじまっただけだということに、異常なほど暑い。

「本当にこの劇場で間違いないのかね？」マルサス

公が、妻のエイニア、友人のカイリス、その姪のヤスメイに手を貸して、棧敷にある柵席の椅子に座らせながら尋ねる。

「わたしも、ちょうど同じことを考えていました」サージルはそう言つて、アレクとカイリスの間のぐらぐらする椅子に、慎重に腰掛けた。

「間違ひございませんわ！」カイリスがくすくす笑い、マルサス公とサージルの二人をからかうように扇で叩く。

マルサスもカイリスも、サージルよりかなり年配に見えるが、彼と知り合つた頃は、二人ともまだほんの若者だつた。マルサスは出世し、今では国庫の管理責任者の一人だ。あごひげは短く刈り込んでいるものの、灰色の髪は襟元まで伸ばしている——現女王がオーリンフェイの長髪を嫌い、男の短髪を好むこのご時世で、彼ほど地位の高い男としては、かなり大胆な髪型だ。サージルの元愛人であるカイリスは、今では最も近い友人の一人であり、社交界

の噂話の貴重な情報源でもある。

サージルはレースで縁取られたハンカチで口元の汗をそつと拭い、下の観客席に目をやった。知つた顔が——大半は商人や船長たちだつたが——彼に挨拶し、答礼されたのを自慢して、仲間内でいばつてゐる。この階級でさえ、誰と知り合いで、どの程度の人脈があるのかは、重要なことなのだ。故国から追放されたオーリンフェイとして有名なサージルは、ここスカラの王都リーミニで何十年もの間、人脈を上手く使いこなし、暮らしてきた。

サージルたち一行は明らかに人目を引き、ざわめきを呼んでいた。マルサス公に何事か耳打ちしているカイリスの髪は入念にまとめられ、宝石の付いたピンがいくつも煌めいている。例によつて、カイリスもエイニアもヤスメイも、薄手の絹に宝石をちりばめた服をまとい、この夏の流行の最先端を体現していた。ここでは、アヒルの群れに囲まれた白鳥のように目立つ。一行の全員が等しく目立っている

に違いないと、サージルは思った。平土間に紛れ込んだスリが二、三人、後で狙おうとこちらをうかがっているのは間違いない。

サージルとアレク自身も、かなり押し出しがいい。二人とも——片方は黒髪、もう片方は金髪という違いはあるが——すらりとした美形の若者で、亜麻布に金糸で飾り縫いした長い夏用の上着をまとい、子鹿皮のズボンに磨き抜かれたブーツを履いている。サージルの黒髪は、上着とよく似た赤の、細い絹のリボンでひとつに束ねてある。アレクの金髪は短い三つ編みにされ、彼の瞳と同じ深い青色の上着の背に垂れていた。

アレクのように、半分人間の血が混ざっている混血^{ヤシエル}は、一般のオーリンフェイに比べると成熟が早いのだが、人間として見ると、もうすぐ二十一歳になるとは思えないほど童顔だ。母方の血が濃く出たのであろう、その面立ちには容姿端麗^{たんれい}な種族であるフェイらしさが現れており、ヒゲもないが、目や髪

の色は父親譲りだった。

サージルは、祖国を追われた放蕩^{ほうどう}な若者を演じている。半分は事実だが、心から道楽にふけているわけではない。もつとも、彼はその役どころを見事に演じきっていた。サージルとアレクは、無鉄砲な貴族の若者や、若くはないが高貴な——カイリスやマルサスのような——友人を数多くもち、彼らと酒を飲んで浮かれ騒ぐことで有名だ。しかし、羽目を外しすぎて信頼性を損^{そと}なうような真似^{まね}はせず、万一、失敗してしまった場合でも、サージルが王室と遠い親戚関係にあること〔訳注 約三百年前の女王イドリレイン一世の再婚相手はポークゼアサ一族のフェイで、サージルの親戚に当たる〕が物を言って、大事には至らずにすんだ。美丈夫^{ハンサム}でめかし屋で異国的な魅力溢^{あふ}れる、灰色の瞳のオーリンフェイは、優れた人脈をもちながらも重要性の低い貴族として位置づけられている。

もし二人がこの国に果たしている真の役割が明る

みに出れば、彼らの放蕩ぶりに眉をひそめた以上に、人々の眉は驚きで吊り上がることだろう。

「前線からの最新の報告をまだ耳にしてはおるまい？」マルサスが尋ねてきた。

フォリア女王は今なおプレニマーとの戦争を続けている。女王率いるスカラ軍は二ヶ月前に冬の休戦期間を終え、戦場であるミケーナまで再び北上していった。

マルサスはサージルに身を寄せて声を低めた。「伝令どもが明日告示することになっておるから、今ここでそなたに言っても問題なからう。プレニマーの大君主が和平交渉を求めてきた。フォリア様は拒んだがな。女王陛下は、敵を一兵残らずベンシヤールまで撤退させ、敵地にて壊滅させると誓った」

サージルが首をふる。「終わりなき争いを終わらせるつもりなんでしょう。母親にさえてできなかったものを、フォリアにできると思われますか？」

「コラザン殿下は、慎重ながらも楽観的な見方をし

ておられるようだ」

劇場の扉が再び開き、ナイアニス卿と騒々しい取り巻が入ってきて、一番離れた柵席にどこかとお上がつていく。ナイアニスたちは《光通り》から可愛らしい高級娼婦を何人も連れてきており、全員が大量のワインを飲んでいるのは一目瞭然だった。彼らの中に、エイリユアルの娼館のマイリチアがいた。黒髪のマイリチアは、アレクと一晚を共にした間柄だ。サージルは嫉妬する性質ではないし、そもそも女を世話してやろうと自分でアレクをエイリユアルの娼館に連れて行つたのだから、どうこう言える立場ではない。今晚のお相手が見ていない隙に、マイリチアがこちらに手をふってきたので、サージルはキスを投げた。アレクが恥ずかしそうに手をふり返す。

ナイアニスがこちらに気づき、叫んできた。「これが終わったら、賭場に行くつもりだ。あんたらも来いよ！」

サージルは曖昧に手をふり返しておいた。

「劇を観るなんて、数週間ぶりです。この劇団が、あなたのおっしゃるとおりに素晴らしければいいんですけど」アレクがカイリスに言った。

「それに、ノミを家に連れ帰らずにすめばいいのですが」左ひじの内側のしつこい痒みを掻きながら、サージルがぼやく。

「屋根の下で観られるだけ幸運だと思いいなつて」カイリスが応えた。「最近まで、この一座は低地街の道端で演じていたのよ。彼らはミケーナからの避難民なの。この春、プレニマー軍がナンタを侵略したときに、命からがら逃げてきたそうよ」

プレニマーとスカラが戦争になると、二つの国に挟まれるミケーナがいつも戦場になってきた。逃げられる者は、北ならフォルクワイン、南ならスカラに逃げる。スカラの北東地域には、そこここにミケーナ人街ができています。さらに、スカラ人が脅威に感じるほど多数のミケーナ人がリーミニーに向かい、

この地で幸運をつかもうとしていた。しかし、その大半は、早々に幻想を打ち砕かれることになるのだ。《海市場》と《神殿地区》周辺の借家は、どうにか暮らしを立てている家族連れでこった返している。最も不運な者たちは《環状壁》と呼ばれる都の二重防壁の間——人が住むための土地はない——の南側の一角に移り住み、絶望的な困窮と退廃にあえいで生きるのだ。

この一座の者たちは、カイリスのような人々の関心を引きつけたのだから、ひと握りの幸運な人たちの部類に入るようだ。カイリスはお抱えのお針子たちから彼らの話を聞いたらしい。サージルと同じように、カイリスは楽しませてくれる相手ならば、階級の違いなど気にも留めない。

「劇の題は何だね？」マルサスが尋ねる。

「熊の王」ですわ」カイリスが答えた。「サージル、あなたはこの題名、聞いたことがあって？ わたくしはないのよ」

「わたしも初耳ですが、ミケーナの劇に精通しているわけではありませんので。ミケーナの劇は少々退屈なものが多いとは聞いていますが」

「この劇は違っていてよ。とにかく、そう聞きましたわ」

ちやうどそのとき、舞台裏から太鼓の音が聞こえてきた。心臓の鼓動のように、ゆっくりと深く響く。厳肅な顔をした、印象的な赤毛の男が舞台に進み出てきた。衣装は昔の貴族らしく見せようとしているが、くず屋の荷車から集めた端切れを継ぎ合わせるような粗末な代物だ。黒い目張りを入れた目は遠くを見つめており、彼が片手を挙げると、場内が水を打ったように静かになった。

「昔々、黒き船団の時代、東の山脈の奥深くで、頭に羊膜を付けたまま、一人の赤子が生まれた」独特な抑揚で発せられる深い声が、場内に響き渡る。彼の背後では、ぼろぼろのドレスとヴェールを身に着けた娘が舞台の上で身もだえしながら叫び、スカー

トの下から彩色された人形を取り出した。人形の顔も、ヴェールで覆われている。

「ミケーナの東部に山脈なんてないのに」アレクがささやく。

「劇だからこそ許される嘘さ」サージルは笑みを浮かべてささやく返した。

語り手が続ける。「羊膜が取り払われたとき、水の宝玉の如き目が、乳を与えんとする母親の唇から息を奪った」

娘はうめき声をあげて死んだ。舞台裏から、なかなかそれらしい赤ん坊の泣き声が聞こえてくる。古くさい熊の毛皮をまとった年配の女が足をひきずって登場し、人形を抱き上げると、両腕に抱えてあやしはじめた。

「雌の熊が赤子を見つけ、我が子のように乳をやり育てたが、やがて狩人がその熊を殺した」

灰色の巻き毛の老人が荒削りな槍を手に舞台に跳び上がり、熊を突き刺す真似をした。

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF
形式で、作成されています。この続きは
書店にてお求めの上、お楽しみください。